智惠子抄

高村光太郎

詩集

智恵子抄

高村光太郎

詩集 智恵子抄

高村光太郎

詩集 智惠子抄

高村光太郎

智惠子抄

人に

いやなんです
あなたのいつてしまふのが——

花よりさきに實のなるやうな
種子よりさきに芽の出るやうな
夏から春のすぐ來るやうな
そんな理窟に合はない不自然を
どうかしないでゐて下さい

型のやうな旦那さまと
まるい字をかくそのあなたと
かう考へてさへなぜか私は泣かれます
小鳥のやうに臆病で
大風のやうにわがままな
あなたがお嫁にゆくなんて

いやなんです
あなたのいつてしまふのが——

なぜさうたやすく
さあ何といひませう——まあ言はば
その身を賣る氣になれるんでせう
あなたはその身を賣るんです
一人の世界から
萬人の世界へ
そして男に負けて
無意味に負けて
ああ何といふ醜惡事でせう
まるでさう

チシアンの畫いた繪が
鶴巻町へ買物に出るのです
私は淋しい　かなしい
何といふ氣はないけれど
恰度あなたの下すつた
あのグロキシニアの
大きな花の腐つてゆくのを見る樣な
私を棄てて腐つてゆくのを見る樣な
空を旅してゆく鳥の
ゆくへをぢつとみてゐる樣な

浪の碎けるあの悲しい自棄のこころ
はかない　淋しい　燒けつく樣な
――それでも戀とはちがひます
サンタマリア
ちがひます　ちがひます
何がどうとはもとより知らねど
いやなんです
あなたのいつてしまふのが――
おまけにお嫁にゆくなんて
よその男のこころのままになるなんて

或る夜のこころ

七月の夜の月は
見よ、ポプラアの林に熱を病めり
かすかに漂ふシクラメンの香りは
言葉なき君が唇にすすり泣けり
森も　道も　草も　遠き街も
いはれなきかなしみにもだえて
ほのかに白き溜息を吐けり

ならびゆくわかき二人は
手を取りて黒き土を踏めり
みえざる魔神はあまき酒を傾け
地にとどろく終列車のひびきは人の運命をあざわらふに似たり
魂はしのびやかに痙攣をおこし
印度更紗の帶はやや汗ばみて
拜火教徒の忍默をつづけむとす
こころよ、こころよ
わがこころよ　めざめよ
君がこころよ　めざめよ

こはなに事を意味するならむ
斷ちがたく　苦しく　のがれまほしく
又あまく　去りがたく　堪へがたく——
こころよ　こころよ
病の床を起き出でよ
そのアッシシュの假睡をふりすてよ
されど眼に見ゆるもの今はみな狂ほしきなり
七月の夜の月も
見よ　ポプラアの林に熱を病めり
やみがたき病よ

わがこころは溫室の草の上
うつくしき毒蟲の爲にさいなまる
こころよ　こころよ
——あはれ何を呼びたまふや
今は無言の領する夜半なるものを——

おそれ

いけない　いけない
靜かにしてゐる此の水に手を觸れてはいけない
まして石を投げ込んではいけない
一滴の水の微顫も
無益な千萬の波動をつひやすのだ
水の靜けさを貴んで
靜寂の價を量らなければいけない

あなたは其のさきを私に話してはいけない
あなたの今言はうとしてゐる事は世の中の最大危險の一つだ
口から外へ出さなければいい
出せば則ち雷火である
あなたは女だ
男のやうだと言はれてもやはり女だ
あの蒼黑い空に汗ばんでゐる圓い月だ
世界を夢に導き　刹那を永遠に置きかへようとする月だ
それでいい　それでいい

その夢を現(うつつ)にかへし
永遠を刹那にふり戻してはいけない
その上
この澄みきつた水の中へ
そんなあぶないものを投げ込んではいけない

私の心の靜寂は血で買つた寶である
あなたには分りやうのない血を犧牲にした寶である
この靜寂は私の生命(いのち)であり、

この靜寂は私の神である
しかも氣むつかしい神である
夏の夜の食慾にさへも
尙ほ烈しい擾亂を惹き起すのである
あなたはその一點に手を觸れようとするのか

いけない　いけない
あなたは靜寂の價を量らなければいけない
さもなければ
非常な覺悟をしてかからなければいけない

その一個の石の起す波動は
あなたを襲つてあなたをその渦中に捲き込むかもしれない
百千倍の打撃をあなたに與へるかも知れない
あなたは女だ
これに堪へられるだけの力を作らなければいけない
それが出來ようか
あなたは其のさきを私に話してはいけない
いけない　いけない
御覽なさい

煤烟と油じみの停車場も
今は此の月と少し暑くるしい靄との中に
何か偉大な美を包んでゐる寶藏のやうに見えるではないか
あの青と赤とのシグナルの明りは
無言と送目との間に絶大な役目を果たし
はるかに月夜の情調に歌をあはせてゐる
私は今何かに圍まれてゐる
或る雰圍氣に
或る不思議な調節を司る無形な力に
そして最も貴重な平衡を得てゐる

私の魂は永遠をおもひ
私の肉眼は萬物に無限の價値を見る
しづかに　しづかに
私は今或る力に絶えず觸れながら
言葉を忘れてゐる

いけない　いけない
靜かにしてゐる此の水に手を觸れてはいけない
まして石を投げ込んではいけない

或る宵

瓦斯の暖爐に火が燃える
ウウロン茶　風　細い夕月

――それだ　それだ　それが世の中だ
彼等の欲する眞面目とは禮服の事だ
人工を天然に加へる事だ
直立不動の姿勢の事だ

彼等は自分等の心を世の中のどさくさまぎれになくしてしまつた
曾て裸體のままでゐた冷暖自知の心を——
あなたは此を見て何も不思議がる事はない
それが世の中だ
心に多くの俗念を抱いて
眼前咫尺の間を見つめてゐる厭な冷酷な人間の集りだ
それ故　眞實に生きようとする者は
——むかしから　今でも　このさきも——
却て眞摯でないとせられる

あなたの受けたやうな迫害をうける
卑怯な彼等は
又誠意のない彼等は
初め驚異の聲を發して我等を眺め
ありとある雜言を唄つて彼等の閑な時間をつぶさうとする
誠意のない彼等は事件の人間をさし置いて唯事件の當體をいぢ
くるばかりだ
いやしむべきは世の中だ
愧づべきは其の渦中の矮人だ
我等は爲すべき事を爲し

進むべき道を進み
自然の掟を尊んで
行往坐臥我等の思ふ所と自然の定律と相戻らない境地に到らな
ければならない
最善の力は自分等を信ずる所にのみある
蛙の様な醜い彼等の姿に驚いてはいけない
むしろ其の姿にグロテスクの美を御覧なさい
我等はただ愛する心を味へばいい
あらゆる紛糾を破つて
自然と自由とに生きねばならない

風のふくやうに　雲の飛ぶやうに
必然の理法と　内心の要求と　叡智の暗示とに嘘がなければい
い
自然は賢明である
自然は細心である
半端物のやうな彼等のために心を悩ますのはお止しなさい
さあ　又銀座で質素な飯でも喰ひませう

郊外の人に

わがこころはいま大風の如く君にむかへり
愛人よ
いまは青き魚の肌にしみたる寒き夜もふけ渡りたり
されば安らかに郊外の家に眠れかし
をさな兒のまことこそ君のすべてなれ
あまり清く透きとほりたれば
これを見るもの皆あしきこころをすてけり

また善きと惡しきとは被ふ所なく其の前にあらはれたり
君こそはげにこよなき審判官なれ
汚れ果てたる我がかずかずの姿の中に
をさな兒のまことも
君はたふとき吾がわれをこそ見出でつれ
君の見いでつるものをわれは知らず
ただ我は君をこよなき審判官とすれば
君によりてこころよろこび
わが知らぬわれの
わがあたたかき肉のうちに籠れるを信ずるなり

冬なれば欅の葉も落ちつくしたり
音もなき夜なり
わがこころはいま大風の如く君に向へり
そは地の底より湧きいづる貴くやはらかき溫泉(いでゆ)にして
君が清き肌のくまぐまを殘りなくひたすなり
わがこころは君の動くがままに
はね　をどり　飛びさわげども
つねに君をまもることを忘れず
愛人よ
こは比ひなき命の靈泉なり

されば君は安らかに眠れかし
惡人のごとき寒き冬の夜なれば
いまは安らかに郊外の家に眠れかし
をさな兒の如く眠れかし

冬の朝のめざめ

冬の朝なれば
ヨルダンの川も薄く氷りたる可し
われは白き毛布に包まれて我が寢室の内にあり
基督に洗禮を施すヨハネの心を
ヨハネの首を抱きたるサロオメの心を
我はわがこころの中に求めむとす
冬の朝なれば街より

つつましくからころと下駄の音も響くなり
大きなる自然こそはわが全身の所有なれ
しづかに運る天行のごとく
われも歩む可し
するどきモツカの香りは
よみがへりたる精靈の如く眼をみはり
いづこよりか室の内にしのび入る
われは此の時
むしろ數理學者の冷靜をもて
世人の形くる社會の波動にあやしき因律のめぐるを知る

起きよ我が愛人よ
冬の朝なれば
郊外の家にも鶏は夙に來鳴く可し
わが愛人は今くろき眼をあきたらむ
をさな兒のごとく手を伸ばし
朝の光りを喜び
小鳥の聲を笑ふならむ
かく思ふとき
我は堪へがたき力の爲めに動かされ
白き毛布を打ちて

愛の頌歌(ほめうた)をうたふなり
冬の朝なれば
こころいそいそと勵み
また高くさけび
清らかにしてつよき生活をおもふ
青き琥珀の空に
見えざる金粉ぞただよふなる
ポインタアの吠ゆる聲とほく來れば
ものを求むる我が習癖はふるひ立ち
たちまちに又わが愛人を戀ふるなり

冬の朝なれば
ヨルダンの川に氷を嚙まむ

深夜の雪

あたたかいガスだんろの火は
ほのかに音を立て、
しめきつた書齋の電燈は
しづかにやや疲れ氣味の二人を照す。
宵からの曇り空が雪にかはり、
さつき牕から見れば
もう一面に白かつたが、

ただ音もなく降りつもる雪の重さを
地上と屋根と二人のこころとに感じ、
むしろ樂しみを包んで軟いその重さに
世界は息をひそめて子供心の眼をみはる。
「これみやもうこんなに積つたぜ」
と、にじんだ聲が遠くに聞え、
やがてぽんぽんと下駄の齒をはたく音。
あとはだんまりの夜も十一時となれば、
話の種さへ切れ
紅茶もものうく

ただ二人手をとつて
聲の無い此の世の中の深い心に耳を傾け、
流れわたる時間の姿をみつめ、
ほんのり汗ばんだ顏は安らかさに滿ちて
ありとある人の感情をも容易くうけいれようとする。
又ぽんぽんとはたく音の後から
車らしい何かの響き——
「ああ　御覽なさい　あの雪」
と、私が言へば、
答へる人は忽ち童話の中に生きはじめ、

かすかに口を開いて
雪をよろこぶ。
雪も深夜をよろこんで
數限りもなく降りつもる。
あたたかい雪、
しんしんと身に迫つて重たい雪が——

人類の泉

世界がわかわかしい緑になつて
青い雨がまた降つて來ます
この雨の音が
むらがり起る生物のいのちのあらはれとなつて
いつも私を堪らなくおびやかすのです
そして私のいきり立つ魂は
私を乘り超え私を脱れて

づんづんと私を作つてゆくのです
いま死んで　いま生れるのです
二時が三時になり
青葉のさきから又も若葉の萠え出すやうに
今日もこの魂の加速度を
自分ながら胸一ぱいに感じてゐました
そして極度の靜寂をたもつて
ぢつと坐つてゐました
自然と涙が流れ
抱きしめる樣にあなたを思ひつめてゐました

あなたは本當に私の半身です
あなたが一番たしかに私の信を握り
あなたこそ私の肉身の痛烈を奥底から分つのです
私にはあなたがある
あなたがある
私はかなり殘酷に人間の孤獨を味つて來たのです
おそろしい自棄の境にまで飛び込んだのをあなたは知つて居ま
す
私の生(いのち)を根から見てくれるのは
私を全部に解してくれるのは

ただあなたです
私は自分のゆく道の開路者(ピオニエ)です
私の正しさは草木の正しさです
ああ　あなたは其を生きた眼で見てくれるのです
もとよりあなたはあなたのいのちを持つてゐます
あなたは海水の流動する力をもつてゐます
あなたが私にある事は
微笑が私にある事です
あなたによつて私の生(いのち)は複雑になり　豐富になります
そして孤獨を知りつつ　孤獨を感じないのです

私は今生きてゐる社會で
もう萬人の通る通路から數歩自分の道に踏み込みました
もう共に手を取る友達はありません
ただ互に或る部分を了解し合ふ友達があるのみです
私は此の孤獨を悲しまなくなりました
此は自然であり　又必然であるのですから
そして此の孤獨に滿足さへしようとするのです
けれども
私にあなたが無いとしたら——
ああ　それは想像も出來ません

想像するのも愚かです
私にはあなたがある
あなたがある
そしてあなたの内には大きな愛の世界があります
私は人から離れて孤獨になりながら
あなたを通じて再び人類の生きた氣息に接します
ヒユウマニテイの中に活躍します
すべてから脱却して
ただあなたに向ふのです
深いとほい人類の泉に肌をひたすのです

あなたは私の爲めに生れたのだ
私にはあなたがある
あなたがある　あなたがある

僕等

僕はあなたをおもふたびに
一ばんぢかに永遠を感じる
僕があり　あなたがある
自然はこれに盡きてゐる
僕のいのちと　あなたのいのちとが
よれ合ひ　もつれ合ひ　とけ合ひ
渾沌としたはじめにかへる
すべての差別見は僕等の間に價値を失ふ

僕等にとつては凡てが絶對だ
そこには世にいふ男女の戰がない
信仰と敬虔と戀愛と自由とがある
そして大變な力と權威とがある
人間の一端と他端との融合だ
僕は丁度自然を信じ切る心安さで
僕等のいのちを信じてゐる
そして世間といふものを蹂躙してゐる
頑固な俗情に打ち勝つてゐる
二人ははるかに其處をのり超えてゐる

僕は自分の痛さがあなたの痛さである事を感じる
僕は自分のこころよさがあなたのこころよさである事を感じる
自分を恃むやうにあなたをたのむ
自分が伸びてゆくのはあなたが育つてゆく事だとおもつてゐる
僕はいくら早足に歩いてもあなたを置き去りにする事はないと
信じ　安心してゐる
僕が活力にみちてる様に
あなたは若若しさにかがやいてゐる
あなたは火だ
あなたは僕に古くなればなるほど新しさを感じさせる

僕にとつてあなたは新奇の無盡藏だ
凡ての枝葉を取り去つた現實のかたまりだ
あなたのせつぷんは僕にうるほひを與へ
あなたの抱擁は僕に極甚の滋味を與へる
あなたの冷たい手足
あなたの重たく　まろいからだ
あなたの燐光のやうな皮膚
その四肢胴體をつらぬく生きものの力
此等はみな僕の最良のいのちの糧となるものだ
あなたは僕をたのみ

あなたは僕に生きる
それがすべてあなた自身を生かす事だ
僕等はいのちを惜しむ
僕等は休む事をしない
僕等は高く　どこまでも高く僕等を押し上げてゆかないでは
　たまらない
伸びないでは
大きくなりきらないでは
深くなり通さないでは
――何といふ光だ　何といふ喜だ

愛の嘆美

底の知れない肉體の慾は
あげ潮どきのおそろしいちから――
なほも燃え立つ汗ばんだ火に
火龍(サラマンドラ)はてんてんと躍る

ふりしきる雪は深夜に婚姻飛揚(ヴォルニュプシアル)の宴(うたげ)をあげ
寂寞(じゃくまく)とした空中の歡喜をさけぶ

われらは世にも美しい力にくだかれ
このとき深密のながれに身をひたして
いきり立つ薔薇いろの靄に息づき
因陀羅網の珠玉に照りかへして
われらのいのちを無盡に鑄る

冬に潜む搖籃の魔力と
冬にめぐむ下萠の生熱と――
すべての内に燃えるものは「時」の脈搏と共に脈うち
われらの全身に恍惚の電流をひびかす

われらの皮膚はすさまじくめざめ
われらの内臓は生存の喜にのたうち
毛髪は螢光を發し
指は獨自の生命を得て五體に匍ひまつはり
道を藏した渾沌のまことの世界は
たちまちわれらの上にその姿をあらはす

光にみち
幸にみち
あらゆる差別は一音にめぐり

毒藥と甘露とは其の筐を同じくし
堪へがたい疼痛は身をよぢらしめ
極甚の法悦は不可思議の迷路を輝かす

われらは雪にあたたかく埋もれ
天然の素中にとろけて
果てしのない地上の愛をむさぼり
はるかにわれらの生(いのち)を讃めたたへる

晩餐

暴風(しけ)をくらつた土砂ぶりの中を
ぬれ鼠になつて
買つた米が一升
二十四錢五厘だ
くさやの干ものを五枚
澤庵を一本
生姜の赤漬

玉子は鳥屋(とや)から
海苔は鋼鐵をうちのべたやうな奴
薩摩あげ
かつをの鹽辛

湯をたぎらして
餓鬼道のやうに喰ふ我等の晩餐

ふきつのる嵐は
瓦にぶつけて

家鳴震動のけたたましく
われらの食慾は頑健にすすみ
ものを喰らひて己が血となす本能の力に迫られ
やがて飽滿の恍惚に入れば
われら靜かに手を取つて
心にかぎりなき喜を叫び
かつ祈る
日常の瑣事にいのちあれ
生活のくまぐまに緻密なる光彩あれ
われらのすべてに溢れこぼるるものあれ

われらつねにみちよ

われらの晩餐は
嵐よりも烈しい力を帶び
われらの食後の倦怠は
不思議な肉慾をめざましめて
豪雨の中に燃えあがる
われらの五體を讃嘆せしめる
まづしいわれらの晩餐はこれだ

樹下の二人

——みちのくの安達が原の二本松松の根かたに人立てる見ゆ——

あれが阿多多羅山、
あの光るのが阿武隈川。

かうやつて言葉すくなに坐つてゐると、
うつとりねむるやうな頭の中に、

ただ遠い世の松風ばかりが薄みどりに吹き渡ります。
この大きな冬のはじめの野山の中に、
あなたと二人靜かに燃えて手を組んでゐるよろこびを、
下を見てゐるあの白い雲にかくすのは止しませう。

あなたは不思議な仙丹を魂の壺にくゆらせて
ああ、何といふ幽妙な愛の海ぞこに人を誘ふことか、
ふたり一緒に歩いた十年の季節の展望は、
ただあなたの中に女人の無限を見せるばかり。
無限の境に烟るものこそ、

こんなにも情意に惱む私を清めてくれ、
こんなにも苦澁を身に負ふ私に爽かな若さの泉を注いでくれる、
むしろ魔もののやうに捉へがたい
妙に變幻するものですね。

あれが阿多多羅山、
あの光るのが阿武隈川。

ここはあなたの生れたふるさと、
あの小さな白壁の點點があなたのうちの酒庫(さかぐら)。

それでは足をのびのびと投げ出して、
このがらんと晴れ渡つた北國の木の香に滿ちた空氣を吸はう。
あなたそのもののやうな此のひいやりと快い、
すんなりと彈力ある雰圍氣に肌を洗はう。
私は又あした遠く去る、
あの無賴の都、混沌たる愛憎の渦の中へ、
私の恐れる、しかも執着深いあの人間喜劇のただ中へ。
ここはあなたの生れたふるさと、
この不思議な別箇の肉身を生んだ天地。
まだ松風が吹いてゐます。

もう一度この冬のはじめの物寂しいパノラマの地理を教へて下さい。

あれが阿多多羅山、
あの光るのが阿武隈川。

狂奔する牛

ああ、あなたがそんなにおびえるのは
今のあれを見たのですね。
まるで通り魔のやうに、
この深山のまきの林をとどろかして、
この深い寂寞の境にあんな雪崩をまき起して
今はもうどこかへ往つてしまつた
あの狂奔する牛の群を。

今日はもう止しませう、
畫きかけてゐたあの穂高の三角の尾根に
もうテル　ヴェルトの雲が出ました。
槍の氷を溶かして來る
あのセルリアンの梓川に
もう山山がかぶさりました。
谷の白楊が遠く風になびいてゐます。
今日はもう畫くのを止して
この人跡絶えた神苑をけがさぬほどに

又好きな焚火をしませう。
天然がきれいに掃き清めたこの苔の上に
あなたもしづかにおすわりなさい。

あなたがそんなにおびえるのは
どつと逃げる牝牛の群を追ひかけて
ものおそろしくも息せき切つた、
血まみれの、若い、あの變貌した牡牛を見たからですね。
けれどこの神神しい山上に見たあの露骨な獸性を
いつかはあなたもあはれと思ふ時が來るでせう。

もつと多くの事を此の身に知つて、
いつかは靜かな愛にほほゑみながら——

鯰

盥の中でぴしやりとはねる音がする。
夜が更けると小刀の刃が冴える。
木を削るのは冬の夜の北風の爲事である。
暖爐に入れる石炭が無くなつても、
鯰よ、
お前は氷の下でむしろ莫大な夢を喰ふか。
檜の木片(こうば)は私の眷族、

智惠子は貧におどろかない。
鯰よ、
お前の鰭に劔があり、
お前の尻尾に觸角があり、
お前の鰓に黑金の覆輪があり、
さうしてお前の樂天にそんな石頭があるといふのは、
何と面白い私の爲事への挨拶であらう。
風が落ちて板の間に蘭の香ひがする。
智惠子は寢た。
私は彫りかけの鯰を傍へ押しやり、

研水(とみず)を新しくして
更に鋭い明日の小刀を瀏瀏と研ぐ。

夜の二人

私達の最後が餓死であらうといふ豫言は、
しとしとと雪の上に降る霙まじりの夜の雨の言つた事です。
智恵子は人並はづれた覺悟のよい女だけれど
まだ餓死よりは火あぶりの方をのぞむ中世期の夢を持つてゐます。
私達はすつかり默つてもう一度雨をきかうと耳をすましました。
少し風が出たと見えて薔薇の枝が窓硝子に爪を立てます。

あなたはだんだんきれいになる

をんなが附屬品をだんだん棄てると
どうしてこんなにきれいになるのか
年で洗はれたあなたのからだは
無邊際を飛ぶ天の金屬。
見えも外聞もてんで齒のたたない
中身ばかりの清冽な生きものが
生きて動いてさつさつと意欲する。

をんながをんなを取りもどすのは
かうした世紀の修業によるのか。
あなたが默つて立つてゐると
まことに神の造りしものだ。
時々內心おどろくほど
あなたはだんだんきれいになる。

あどけない話

智惠子は東京に空が無いといふ、
ほんとの空が見たいといふ。
私は驚いて空を見る。
櫻若葉の間に在るのは、
切つても切れない
むかしなじみのきれいな空だ。
どんよりけむる地平のぼかしは

うすもも色の朝のしめりだ。
智惠子は遠くを見ながら言ふ、
阿多多羅山の山の上に
毎日出てゐる青い空が
智惠子のほんとの空だといふ。
あどけない空の話である。

同棲同類

—私は口をむすんで粘土をいぢる。
—智恵子はトンカラ機を織る。
—鼠は床にこぼれた南京豆を取りに來る。
—それを雀が横取りする。
—カマキリは物干し綱に鎌を研ぐ。
—蠅とり蜘蛛は三段飛。
—かけた手拭はひとりでじやれる。

—郵便物ががちやりと落ちる。
—時計はひるね。
—鐵瓶もひるね。
—芙蓉の葉は舌を垂らす。
—づしんと小さな地震。
油蟬を伴奏にして
この一群の同棲同類の頭の上から
子午線上の大火團がまつさかさまにがつと照らす。

美の監禁に手渡す者

納税告知書の赤い手觸りが袂にある、
やつとラヂオから解放された寒夜の風が道路にある。

賣る事の理不盡、購ひ得るものは所有し得る者、
所有は隔離、美の監禁に手渡すもの、我、

兩立しない造形の秘技と貨幣の强引

兩立しない創造の喜と不耕貪食の苦さ

がらんとした家に待つのは智惠子、粘土、及び木片(こっぱ)
ふところの鯛焼はまだほのかに熱い、つぶれる。

人生遠視

足もとから鳥がたつ
自分の妻が狂氣する
自分の著物がぼろになる
照尺距離三千メートル
ああ此の鐵砲は長すぎる

風にのる智恵子

狂つた智恵子は口をきかない
ただ尾長や千鳥と相圖する
防風林の丘つづき
いちめんの松の花粉は黄いろく流れ
五月晴の風に九十九里の濱はけむる
智恵子の浴衣が松にかくれ又あらはれ
白い砂には松露がある

わたしは松露をひろひながら
ゆつくり智惠子のあとをおふ
尾長や千鳥が智惠子の友だち
もう人間であることをやめた智惠子に
恐ろしくきれいな朝の天空は絶好の遊歩場
智惠子飛ぶ

千鳥と遊ぶ智惠子

人つ子ひとり居ない九十九里の砂濱の
砂にすわつて智惠子は遊ぶ
無數の友だちが智惠子の名をよぶ。
ちい、ちい、ちい、ちい、ちい——
砂に小さな趾あとをつけて
千鳥が智惠子に寄つて來る。
口の中でいつでも何か言つてる智惠子が
兩手をあげてよびかへす。

ちい、ちい、ちい——
兩手の貝を千鳥がねだる。
智惠子はそれをばらばら投げる。
群れ立つ千鳥が智惠子をよぶ。
ちい、ちい、ちい、ちい、ちい——
人間商買さらりとやめて、
もう天然の向うへ行つてしまつた智惠子の
うしろ姿がぽつんと見える。
二丁も離れた防風林の夕日の中で
松の花粉をあびながら私はいつまでも立ち盡す。

値ひがたき智惠子

智惠子は見えないものを見、
聞えないものを聞く。
智惠子は行けないところへ行き、
出來ないことを爲る。
智惠子は現身(うつしみ)のわたしを見ず、

わたしのうしろのわたしに焦がれる。
智恵子はくるしみの重さを今はすてて、
限りない荒漠の美意識圏にさまよひ出た。
わたしをよぶ聲をしきりにきくが、
智恵子はもう人間界の切符を持たない。

山麓の二人

二つに裂けて傾く磐梯山の裏山は
險しく八月の頭上の空に目をみはり
裾野とほく靡いて波うち
芒ぼうぼうと人をうづめる
半ば狂へる妻は草を藉いて坐し
わたくしの手に重くもたれて
泣きやまぬ童女のやうに慟哭する

——わたしもうぢき駄目になる
意識を襲ふ宿命の鬼にさらはれて
のがれる途無き魂との別離
その不可抗の豫感
——わたしもうぢき駄目になる
涙にぬれた手に山風が冷たく觸れる
わたくしは默つて妻の姿を見入る
意識の境から最後にふり返つて
わたくしに縋る
この妻をとりもどすすべが今は世に無い

わたくしの心はこの時二つに裂けて脫落し
間(げき)として二人をつつむ此の天地と一つになつた

或る日の記

水墨の横ものを描きをへて
その乾くのを待ちながら立つてみて居る
上高地から見た前穂高の岩の幔幕
墨のにじんだ明神岳のピラミッド
作品は時空を滅する
私の顔に天上から霧がふきつけ
私の精神に些かの條件反射のあともない

乾いた唐紙はたちまち風にふかれて
このお化屋敷の板の間に波をうつ
私はそれを卷いて小包につくらうとする
一切の苦難は心にめざめ
一切の悲歎は身うちにかへる
智恵子狂ひて既に六年
生活の試煉鬢髪爲に白い
私は手を休めて荷造りの新聞に見入る
そこにあるのは寫眞であつた
そそり立つ廬山に向つて無言に並ぶ野砲の列

レモン哀歌

そんなにもあなたはレモンを待つてゐた
かなしく白くあかるい死の床で
わたしの手からとつた一つのレモンを
あなたのきれいな齒ががりりと嚙んだ
トバアズいろの香氣が立つ
その數滴の天のものなるレモンの汁は
ぱつとあなたの意識を正常にした
あなたの青く澄んだ眼がかすかに笑ふ

わたしの手を握るあなたの力の健康さよ
あなたの咽喉に嵐はあるが
かういふ命の瀬戸ぎはに
智惠子はもとの智惠子となり
生涯の愛を一瞬にかたむけた
それからひと時
昔山巔でしたやうな深呼吸を一つして
あなたの機關はそれなり止まつた
寫眞の前に挿した櫻の花かげに
すずしく光るレモンを今日も置かう

荒涼たる歸宅

あんなに歸りたがつてゐた自分の内へ
智惠子は死んでかへつて來た。
十月の深夜のがらんどうなアトリエの
小さな隅の埃を拂つてきれいに淨め、
私は智惠子をそつと置く。
この一個の動かない人體の前に
私はいつまでも立ちつくす。
人は屏風をさかさにする。

人は燭をともし香をたく。
人は智惠子に化粧する。
さうして事がひとりでに運ぶ。
夜が明けたり日がくれたりして
そこら中がにぎやかになり、
家の中は花にうづまり、
何處かの葬式のやうになり、
いつのまにか智惠子が居なくなる。
私は誰も居ない暗いアトリエにただ立つてゐる。
外は名月といふ月夜らしい。

亡き人に

雀はあなたのやうに夜明けにおきて窓を叩く
枕頭のグロキシニヤはあなたのやうに默つて咲く

朝風は人のやうに私の五體をめざまし
あなたの香りは午前五時の寢部屋に涼しい

私は白いシイツをはねて腕をのばし

夏の朝日にあなたのほほゑみを迎へる

今日が何であるかをあなたはささやく
權威あるもののやうにあなたは立つ

私はあなたの子供となり
あなたは私のうら若い母となる

あなたはまだゐる其處にゐる
あなたは萬物となつて私に滿ちる

私はあなたの愛に値しないと思ふけれど
あなたの愛は一切を無視して私をつつむ

梅酒

死んだ智恵子が造つておいた瓶の梅酒は
十年の重みにどんより澱んで光を葆み、
いま琥珀の杯に凝つて玉のやうだ。
ひとりで早春の夜ふけの寒いとき、
これをあがつてくださいと、
おのれの死後に遺していつた人を思ふ。
おのれのあたまの壊れる不安に脅かされ、

もうぢき駄目になると思ふ悲に
智恵子は身のまはりの始末をした。
七年の狂氣は死んで終つた。
厨に見つけたこの梅酒の芳りある甘さを
わたしはしづかにしづかに味はふ。
狂瀾怒濤の世界の叫も
この一瞬を犯しがたい。
あはれな一個の生命を正視する時、
世界はただこれを遠巻にする。
夜風も絶えた。

うた六首

ひとむきにむしやぶりつきて爲事するわれをさびしと思ふな智惠子

○

氣ちがひといふおどろしき言葉もて人は智惠子をよばむとすなり

いちめんに松の花粉は濱をとび智惠子尾長のと
もがらとなる

わが爲事いのちかたむけて成るきはを智惠子は
知りき知りていたみき

この家に智惠子の息吹みちてのこりひとりめつ
ぶる吾(あ)をいねしめず

光太郎智惠子はたぐひなき夢をきづきてむかし
此所に住みにき

智恵子の半生

妻智恵子が南品川ゼームス坂病院の十五號室で精神分裂症患者として粟粒性肺結核で死んでから旬日で滿二年になる。私はこの世で智恵子にめぐりあつたため、彼女の純愛によつて清淨にされ、以前の廢頽生活から救ひ出される事が出來た經歴を持つて居り、私の精神は一にかかつて彼女の存在そのものの上にあつたので、智恵子の死による精神的打撃は實に烈しく、一時は自己の藝術的製作さへ其の目標を失つたやうな空虛感にとりつかれた幾箇月かを過した。彼女の生前、私は自分の製作した彫刻を何人よりもさきに彼女に見せた。一日の製作の終りにも其を彼女

と一緒に檢討する事が此上もない喜であつた。又彼女はそれを全幅的に受け入れ、理解し、熱愛した。私の作つた木彫小品を彼女は懷に入れて街を歩いてまで愛撫した。彼女の居ないこの世で誰が私の彫刻をそのやうに子供のやうにうけ入れてくれるであらうか。もう見せる人も居やしないといふ思が私を幾箇月間か惱ました。美に關する製作は公式の理念や、壯大な民族意識といふやうなものだけでは決して生れない。さういふものは或は製作の主題となり、或はその動機となる事はあつても、その製作が心の底から生れ出て、生きた血を持つに至るには、必ずそこに大きな愛のやりとりがいる。それは神の愛である事もあらう。大君の愛である事もあらう。又實に一人の女性の底ぬけの純愛である事があるのである。自分の作つたものを熱愛の眼を以て見てくれる一人の人があるといふ意識ほど、美術家にとつて力となるものはない。作りたいものを

必ず作り上げる潜力となるものはない。製作の結果は或は萬人の爲のものともなることがあらう。けれども製作するものの心はその一人の人に見てもらひたいだけで既に一ぱいなのが常である。私はさういふ人を妻の智惠子に持つてゐた。その智惠子が死んでしまつた當座の空虛感はそれ故殆ど無の世界に等しかつた。作りたいものは山ほどあつても作る氣になれなかつた。見てくれる熱愛の眼が此世にもう絶えて無い事を知つてゐるからである。さういふ幾箇月の苦闘の後、或る偶然の事から滿月の夜に、智惠子はその個的存在を失ふ事によつて却て私にとつては普遍的存在となつたのである事を痛感し、それ以來智惠子の息吹を常に身近かに感ずる事が出來、言はば彼女は私と偕にある者となり、私にとつての永遠なるものであるといふ實感の方が強くなつた。私はさうして平靜と心の健康とを取り戻し、仕事の張合がもう一度出て來た。一日の仕事

を終つて製作を眺める時「どうだらう」といつて後ろをふりむけば智惠子はきつと其處に居る。彼女は何處にでも居るのである。

智惠子が結婚してから死ぬまでの二十四年間の生活は愛と生活苦と藝術への精進と矛盾と、さうして闘病との間斷なき一連續に過ぎなかつた。彼女はさういふ渦卷の中で、宿命的に持つてゐた精神上の素質の爲に倒れ、歡喜と絶望と信頼と諦觀とのあざなはれた波濤の間に沒し去つた。彼女の追憶について書く事を人から幾度か示唆されても今日まで其を書く氣がしなかつた。あまりなまなましい苦闘のあとは、たとひ小さな一隅の生活にしても筆にするに忍びなかつたし、又いはば單なる私生活の報告のやうなものに果してどういふ意味があり得るかといふ疑問も強く心を牽制してゐたのである。だが今は書かう。出來るだけ簡單に此の一人の女性の運命を書きとめて置かう。大正昭和の年代に人知れず斯ういふ事に惱み、かういふ事に生き、かういふ事に倒れた女性のあつた事を書き記して、それをあはれな彼女への餞とする事を許させてもらはう。一人に極まれば萬人に通ずるといふことを信じて、今日のやうな時勢の下にも敢て此の筆を執らうとするのである。

今しづかに振りかへつて彼女の上を考へて見ると、その一生を要約すれば、まづ東北地方福島縣二本松町の近在、漆原といふ所の酒造り長沼家に長女として明治十九年に生れ、土地の高女を卒業してから東京目白の日本女子大學校家政科に入學、寮生活をつづけてゐるうちに洋畫に興味を持ち始め、女子大卒業後、郷里の父母の同意を辛うじて得て東京に留まり、太平洋繪畫研究所に通學して油畫を學び、當時の新興畫家であつた中村彝、齋藤與里治、津田青楓の諸氏に出入して其の影響をうけ、又一方、其頃平塚雷鳥女史等の提起した女子思想運動にも加はり、雜誌

「青鞜」の表紙畫などを畫いたりした。それが明治末年頃の事であり、やがて柳八重子女史の紹介で初めて私と知るやうになり、大正三年に私と結婚した。結婚後も油繪の研究に熱中してゐたが、藝術精進と家庭生活との板ばさみとなるやうな月日も漸く多くなり、其上肋膜を病んで以來しばしば病臥を餘儀なくされ、後年郷里の家君を亡ひ、つづいて實家の破產に瀕するにあひ、心痛苦慮は一通りでなかつた。やがて更年期の心神變調が因となつて精神異狀の徵候があらはれ、昭和七年アダリン自殺を計り、幸ひ藥毒からは免れて一旦健康を恢復したが、その後あらゆる療養をも押しのけて徐々に確實に進んで來る腦細胞の疾患のため昭和十年には完全に精神分裂症に捉へられ、其年二月ゼ！ムス坂病院に入院昭和十三年十月其處でしづかに瞑目したのである。

彼女の一生は實に單純であり、純粹に一私人的生活に終始し、いささ

かも社會的意義を有つ生活に觸れなかつた。わづかに「青鞜」に關係してゐた短い期間がその社會的接觸のあつた時と言へばいへる程度に過ぎなかつた。社會的關心を持たなかつたばかりでなく、生來社交的でなかつた。「青鞜」に關係してゐた頃所謂新らしい女の一人として一部の人達の間に相當に顏を知られ、長沼智惠子といふ名がその仲間の口に時々上つたのも、實は當時のゴシップ好きの連中が尾鰭をつけていろいろ面白さうに喧傳したのが因であつて、本人はむしろ無口な、非社交的な非論理的な、一途な性格で押し通してゐたらしかつた。長沼さんとは話がしにくいといふのが當時の女友達の本當の意見のやうであつた。私は其頃の彼女をあまり善く知らないのであるが、津田青楓氏が何かに書いてゐた中に、彼女が高い塗下駄をはいて著物の裾を長く引きずるやうにして歩いてゐたのをよく見かけたといふやうな事があつたのを記憶する。

そんな樣子や口數の少いところから何となく人が彼女に好奇的な謎でも感じてゐたのではないかと思はれる。女水滸傳のやうに思はれたり、又風情ごのみのやうに言はれたりしたやうであるが實際はもつと素朴で無頓著であつたのだらうと想像する。

私は彼女の前半生を殆ど全く知らないと言つていい。彼女について私が知つてゐるのは紹介されて彼女と識つてから以後の事だけである。現在の事で一ばいで、以前の事を知らうとする氣も起らなかつたし、年齢さへ實は後年まで確實には知らなかつたのである。私が知つてからの彼女は實に單純眞摯な性格で、心に何か天上的なものをいつでも湛へて居り、愛と信頼とに全身を投げ出してゐたやうな女性であつた。生來の勝氣から自己の感情はかなり內に抑へてゐたやうで、物腰はおだやかで輕佻な風は見られなかつた。自己を乘り越えて進まうとする氣力の强さに

は時々驚かされる事もあつたが、又そこに隨分無理な努力も人知れず重ねてゐたのである事を今日から考へると推察する事が出來る。

その時には分らなかつたが、後から考へてみれば、結局彼女の半生は精神病にまで到達するやうに進んでゐたやうである。私との此の生活では外に往く道はなかつたやうに見える。どうしてさうかと考へる前に、もつと別な生活を想像してみると、例へば生活するのが東京でなくて鄕里、或は何處かの田園であり、又配偶者が私のやうな美術家でなく、美術に理解ある他の職業の者、殊に農耕牧畜に從事してゐるやうな者であつた場合にはどうであつたらうと考へられる。或はもつと天然の壽を全うし得たかも知れない。さう思はれるほど彼女にとつては肉體的に既に東京が不適當の地であつた。東京の空氣は彼女には常に無味乾燥でざらざらしてゐた。女子大で成瀨校長に奬勵され自轉車に乘つたり、テニス

に熱中したりして頗る元氣潑剌たる娘時代を過したやうであるが、卒業後は概してあまり頑健といふ方ではなく、樣子もほつそりしてゐて、一年の半分近くは田舍や、山へ行つてゐたらしかつた。私と同棲してからも一年に三四箇月は鄕里の家に歸つてゐた。田舍の空氣を吸つて來なければ身體が保たないのであつた。彼女はよく東京には空が無いといつて歎いた。私の「あどけない話」といふ小詩がある。

智惠子は東京に空が無いといふ
ほんとの空が見たいといふ。
私は驚いて空を見る。
櫻若葉の間に在るのは、
切つても切れない

むかしなじみのきれいな空だ。
どんよりけむる地平のぼかしは
うすもも色の朝のしめりだ。
智惠子は遠くを見ながらいふ。
阿多多羅山の山の上に
毎日出てゐる青い空が
智惠子のほんとの空だといふ。
あどけない空の話である。

私自身は東京に生れて東京に育つてゐるため彼女の痛切な訴を身を以て感ずる事が出來ず、彼女もいつかは此の都會の自然に馴染む事だらうと思つてゐたが、彼女の斯かる新鮮な透明な自然への要求は遂に身を終

るまで變らなかつた。彼女は東京に居て此の要求をいろいろな方法で滿たしてゐた。家のまはりに生える雜草の飽くなき寫生、その植物學的探究、張出窓での百合花やトマトの栽培、野菜類の生食、ベトオフェンの第六交響樂レコオドへの惑溺といふやうな事は皆この要求充足の變形であつたに相違なく、此の一事だけでも半生に亘る彼女の表現し得ない不斷のせつなさは想像以上のものであつたであらう。その最後の日、死ぬ數時間前に私が持つて行つたサンキストのレモンの一顆を手にした彼女の喜も亦この一筋につながるものであつたらう。彼女はそのレモンに齒を立てて、すがしい香りと汁液とに身も心も洗はれてゐやうに見えた。

彼女がつひに精神の破綻を來すに至つた更に大きな原因は何といつてもその猛烈な藝術精進と、私への純眞な愛に基く日常生活の營みとの間に起る矛盾撞著の惱みであつたであらう。彼女は繪畫を熱愛した。女子

大在學中既に油繪を畫いてゐたらしく、學藝會に於ける學生劇の背景製作などをいつも引きうけて居たといふ事であり、故郷の兩親が初めは反對してゐたのに遂に畫家になる事を承認したのも、其頃畫いた祖父の肖像畫の出來榮が故郷の人達を驚かしたのに因ると傳へ聞いてゐる。この油繪は私も後に見たが、素朴な中に澁い調和があり、色價の美しい作であつた。卒業後數年間の繪畫については私はよく知らないが、幾分情調本位な甘い氣分のものではなかつたかと思はれる。其頃のものを彼女はすべて破棄してしまつて私には見せなかつた。僅かに素描の下描などで私は其を想像するに過ぎなかつた。私と一緒になつてからは主に靜物の勉强をつづけ幾百枚となく畫いた。風景は故郷に歸つた時や、山などに旅行した時にかき、人物は素描では描いたが、油繪ではつひにまだ本格的に畫くまでに至らなかつた。彼女はセザンヌに傾倒してゐて自然とそ

の影響をうける事も強かつた。私もその頃は彫刻の外に油繪も畫いてゐたが、強勉の部屋は別にしてゐた。彼女は色彩について實に苦しみ惱んだ。そして中途半端の成功を望まなかつたので自虐に等しいと思はれるほど自分自身を責めさいなんだ。或年、故郷に近い五色溫泉に夏を過して其處の風景を畫いて歸つて來た。その中の小品に相當に佳いものがあつたので、彼女も文展に出品する氣になつて、他の大幅のものと一緒にそれを搬入したが、鑑査員の認めるところとならずに落選した。それ以來いくらすすめても彼女は何處の展覽會へも出品しようとしなかつた。自己の作品を公衆に展示する事によつて何か內に欝積するものを世に訴へ、外に發散せしめる機會を得るといふ事も美術家には精神の助けとなるものだと思ふのであるが、さういふ事から自己を內に閉ぢこめてしまつたのも精神の內攻的傾向を助長したかも知れない。彼女は最善をばか

り目指してゐたので何時でも自己に不滿足であり、いつでも作品は未完成に終つた。又事實その油繪にはまだ色彩に不十分なもののある事は爭はれなかつた。その素描にはすばらしい力と優雅とを持つてゐたが、油繪具を十分に克服する事がどうしてもまだ出來なかつた。彼女はそれを悲しんだ。時々はひとり畫架の前で涙を流してゐた。偶然二階の彼女の部屋に行つてさういふところを見ると、私も言ひしれぬ寂しさを感じ慰の言葉も出ない事がよくあつた。ところで、私は人の想像以上に生活不如意で、震災前後に唯一度女中を置いたことがあるだけで、其他は彼女と二人きりの生活であつたし、彼女も私も同じ樣な造型美術家なので、時間の使用について中々むつかしいやりくりが必要であつた。互にその仕事に熱中すれば一日中二人とも食事も出來ず、掃除も出來ず、用事も足せず、一切の生活が停頓してしまふ。さういふ日々もかなり重なり、

結局やつぱり女性である彼女の方が家庭内の雜事を處理せねばならず、おまけに私が晝間彫刻の仕事をすれば、夜は食事の暇も惜しく原稿を書くといふやうな事が多くなるにつれて、ますます彼女の繪畫勉強の時間が喰はれる事になるのであつた。詩歌のやうな仕事などならば、或は頭の中で半分は進める事も出來、かなり零細な時間でも利用出來るかと思ふが、造型美術だけは或る定まつた時間の區劃が無ければどうする事も出來ないので、この點についての彼女の苦慮は思ひやられるものであつた。彼女はどんな事があつても私の仕事の時間を減らすまいとし、私の彫刻をかばひ、私を雜用から防がうと懸命に努力をした。彼女はいつの間にか油繪勉強の時間を縮少し、或時は粘土で彫刻を試みたり、又後には絹糸をつむいだり、其を草木染にしたり、機織を始めたりした。二人の著物や羽織を手織で作つたのが今でも殘つてゐる。同じ草木染の權威

山崎斌氏は彼女の死んだ時弔電に、

袖のところ一すぢ青きしまを織りて
あてなりし人今はなしはや

といふ歌を書いておくられた。結局彼女は口に出さなかつたが、油繪製作に絶望したのであつた。あれほど熱愛して生涯の仕事と思つてゐた自己の藝術に絶望する事はさう容易な心事である筈がない。後年服毒した夜には、隣室に千疋屋から買つて來たばかりの果物籠が靜物風に配置され、畫架には新らしい畫布が立てかけられてあつた。私はそれを見て胸をつかれた。慟哭したくなつた。

彼女はやさしかつたが勝氣であつたので、どんな事でも自分一人の胸

に收めて唯默つて進んだ。そして自己の最高の能力をつねに物に傾注した。藝術に關する事は素より、一般教養のごと、精神上の諸問題についても突きつめるだけつきつめて考へて、曖昧をゆるさず、妥協を卑しんだ。いはば四六時中張りきつてゐた弦のやうなもので、その極度の緊張に堪へられずして腦細胞が破れたのである。精根つきて倒れたのである。彼女の此の內部生活の淸淨さに私は幾度淨められる思をしたか知れない。彼女にくらべると私は實に茫漠として濁つてゐる事を感じた。彼女の眼を見てゐるだけで私は百の教訓以上のものを感得するのが常であつた。彼女の眼には確かに阿多多羅山の山の上に出てゐる天空があつた。私は彼女の胸像を作る時この眼の及び難い事を痛感して自分の汚なさを恥ぢた。今から考へてみても彼女は到底この世に無事に生きながらへてゐられなかつた運命を內部的にも持つてゐたやうに見える。それほど隔絕的

に此の世の空氣と違つた世界の中に生きてゐた。私は時々何だか彼女は假にこの世に存在してゐる魂のやうに思へる事があつたのを記憶する。彼女には世間慾といふものが無かつた。彼女は唯ひたむきに藝術と私とへの愛によつて生きてゐた。さうしていつでも若かつた。精神の若さと共に相貌の若さも著しかつた。彼女と一緒に旅行する度に、ゆくさきざきで人は彼女を私の妹と思つたり、娘とさへ思つたりした。彼女には何かさういふ種類の若さがあつて、死ぬ頃になつても五十歲を超えた女性とは一見して思へなかつた。結婚當時も私は彼女の老年といふものを想像する事が出來ず、「あなたでもお婆さんになるかしら」と戲れに言つた事があるが、彼女はその時、「私年とらないうちに死ぬわ」と不用意に答へたことのあるのを覺えてゐる。さうしてまつたくその通りになつた。

精神病學者の意見では、普通の健康人の腦は隨分ひどい苦惱にも堪へられるものであり、精神病に陷る者は、大部分何等かの意味でその素質を先天的に持つてゐるか、又は怪我とか惡疾とかによつて後天的に持たせられた者であるといふ事である。彼女の家系には精神病の人は居なかつたやうであるが、ただ彼女の弟である實家の長男はかなり常規を逸した素行があり、そのため遂に實家は破産し、彼自身は惡疾をも病んで陋巷に窮死した。しかし遺傳的といひ得る程強い素質がそこに流れてゐると信じられない。又彼女は幼兒の時切石で頭蓋にひどい怪我をした事があるといふ事であるがこれも其の後何の故障もなく平癒してしまつて後年の病氣に關係があるとも思へない。又彼女が腦に變調を起した時、醫者は私に外國で或る病氣の感染を受けた事はないかと質問した。私にはまつたく其の記憶がなかつたし、又私の血液と彼女の血液とを再三檢査

してもらつたが、いつも結果は陰性であつた。さうすると彼女の精神分裂症といふ病氣の起る素質が彼女に肉體的に存在したとは確定し難いのである。だが又あとから考へると、私が知つて以來の彼女の一切の傾向は此の病氣の方へじりじりと一歩づゝ進んでゐたのだとも取れる。その純眞さへも唯ならぬものがあつたのである。思ひつめれば他の一切を放棄して悔まず、所謂矢も楯もたまらぬ氣性を持つてゐたし、私への愛と信頼の強さ深さは殆ど嬰兒のそれのやうであつたといつていい。私が彼女に初めて打たれたのも此の異常な性格の美しさであつた。言ふことが出來れば彼女はすべて異常なのであつた。私が「樹下の二人」といふ詩の中で、

ここがあなたの生れたふるさと

この不思議な別箇の肉身を生んだ天地。

と歌つたのも此の實感から來てゐるのであつた。彼女が一歩づつ最後の破綻に近づいて行つたのか、病氣が螺線のやうにぎりぎりと間違なく押し進んで來たのか、最後に近くなつてからはじめて私も何だか變なのではないかとそれとなく氣がつくやうになつたのであつて、それまでは彼女の精神狀態などについて露ほどの疑も抱いてはゐなかつた。つまり彼女は異常ではあつたが、異狀ではなかつたのである。はじめて異狀を感じたのは彼女の更年期が迫つて來た頃の事である。

追憶の中の彼女をここに簡單に書きとめて置かう。

前述の通り長沼智惠子を私に紹介したのは女子大の先輩柳八重子女史であつた。女史は私の紐育時代からの友人であつた畫家柳敬助君の夫人

で當時櫻楓會の仕事をして居られた。明治四十四年の頃である。私は明治四十二年七月にフランスから歸つて來て、父の家の庭にあつた隱居所の屋根に孔をあけてアトリエ代りにし、そこで彫刻や油繪を盛んに勉强してゐた。一方神田淡路町に琅玕洞といふ小さな美術店を創設して新興藝術の展覽會などをやつたり、當時日本に勃興したスバル一派の新文學運動に加はつたりしてゐたと同時に、遲蒔の青春が爆發して、北原白秋氏、長田秀雄氏、木下杢太郎氏などとさかんに往來してかなり烈しい所謂耽溺生活に陷つてゐた。不安と焦躁と渴望と、何か知られざるものに對する絶望とでめちやめちやな日々を送り、遂に北海道移住を企てたり、それにも忽ち失敗したり、どうなる事か自分でも分らないやうな精神の危機を經驗してゐた時であつた。柳敬助君に友人としての深慮があつたのかも知れないが、丁度さういふ時彼女が私に紹介されたのであつた。

彼女はひどく優雅で、無口で、語尾が消えてしまひ、ただ私の作品を見て、お茶をのんだり、フランス繪畫の話をきいたりして歸つてゆくのが常であつた。私は彼女の着こなしのうまさと、きやしやな姿の好ましさなどしか最初は眼につかなかつた。彼女は決して自分の畫いた繪を持つて來なかつたのでどんなものを畫いてゐるのかまるで知らなかつた。そのうち私は現在のアトリエを父に建ててもらふ事になり、明治四十五年には出來上つて、一人で移り住んだ。彼女はお祝にグロキシニヤの大鉢を持つて此處へ訪ねて來た。丁度明治天皇様崩御の後、私は犬吠へ寫生に出かけた。その時別の宿に彼女が妹さんと一人の親友と一緒に來てゐて又會つた。後に彼女は私の宿へ來て滯在し、一緒に散歩したり食事したり寫生したりした。様子が變に見えたものか、宿の女中が一人必ず私達二人の散歩を監視するためついて來た。心中しかねないと見たらしい。

智惠子が後日語る所によると、その時若し私が何か無理な事でも言ひ出すやうな事があつたら、彼女は即座に入水して死ぬつもりだつたといふ事であつた。私はそんな事は知らなかつたが、此の宿の滯在中に見た彼女の清純な態度と、無欲な素朴な氣質と、限りなきその自然への愛とに強く打たれた。君が濱の濱防風を喜ぶ彼女はまつたく子供であつた。しかし又私は入浴の時、隣の風呂場に居る彼女を偶然に目にして、何だか運命のつながりが二人の間にあるのではないかといふ豫感をふと感じた。彼女は實によく均整がとれてゐた。

やがて彼女から熱烈な手紙が來るやうになり、私も此の人の外に心を託すべき女性は無いと思ふやうになつた。それでも幾度か此の心が一時的のものではないかと自ら疑つた。又彼女にも警告した。それは私の今後の生活の苦闘を思ふと彼女をその中に巻きこむに忍びない氣がしたか

らである。其の頃せまい美術家仲間や女人達の間で二人に關する惡質のゴシップが飛ばされ、二人とも家族などに對して隨分困らせられた。然し彼女は私を信じ切り、私は彼女をむしろ崇拜した。惡聲が四邊に滿ちるほど、私達はますます強く結ばれた。私は自分の中にある不純の分子や溷濁の殘留物を知つてゐるので時々自信を失ひかけると、彼女はいつでも私の中にあるものを清らかな光に照らして見せてくれた。

汚れ果てたる我がかすかすの姿の中に
をさな兒のまことにて
君はたふとき吾がわれをこそ見出でつれ
君の見出でつるものをわれは知らず
ただ我は君をこよなき審判官とすれば

君によりてこころよろこび
わが知らぬわれの
わが溫き肉のうちに籠れるを信ずるなり

と私も歌つたのである。私を破れかぶれの廢頽氣分から遂に引上げ救ひ出してくれたのは彼女の純一な愛であつた。

大正二年八月九月の二箇月間私は信州上高地の清水屋に滯在して、その秋神田のヴィナス倶樂部で岸田劉生君や木村莊八君等と共に開いた生活社の展覽會の油繪を數十枚畫いた。其の頃上高地に行く人は皆島々から岩魚止を經て德本峠を越えたもので、かなりの道のりであつた。その夏同宿には窪田空穗氏や、茨木猪之吉氏も居られ、又丁度穗高登山に來られたウェストン夫妻も居られた。九月に入つてから彼女が畫の道具を

持つて私を訪ねて來た。その知らせをうけた日、私は德本峠を越えて岩魚止まで彼女を迎へに行つた。彼女は案内者に荷物を任せて身輕に登つて來た。山の人もその健脚に驚いてゐた。私は又德本峠を一緒に越えて彼女を清水屋に案内した。上高地の風光に接した彼女の喜は實に大きかつた。それからは毎日私が二人分の畫の道具を肩にかけて寫生に歩きまはつた。彼女は其の頃肋膜を少し痛めてゐるらしかつたが山に居る間はどうやら大した事にもならなかつた。彼女の作畫はこの時始めて見た。かなり主觀的な自然の見方で一種の特色があり、大成すれば面白からうと思つた。私は穂高、明神、燒岳、霞澤、六百嶽、梓川と觸目を悉く畫いた。彼女は其の時私の畫いた自畫像の一枚を後年病臥中でも見てゐた。その時ウェストンから彼女の事を妹さんか、夫人かと問はれた。友達ですと答へたら苦笑してゐた。當時東京の或新聞に「山上の戀」といふ見

出しで上高地に於ける二人の事が誇張されて書かれた。多分下山した人の噂話を種にしたものであらう。それが又家族の人達の神經を痛めさせた。十月一日に一山擧つて島々へ下りた。德本峠の山ふところを埋めてゐた桂の木の黃葉の立派さは忘れ難い。彼女もよくそれを思ひ出して語つた。

それ以來私の兩親はひどく心配した。私は母に實にすまないと思つた。父や母の夢は皆破れた。所謂洋行歸りを利用して彫刻界へ押し出す事もせず、學校の先生をすすめても斷り、然るべき江戸前のお嫁さんも貰はず、まるで了見が分らない事になつてしまつた。實にすまないと思つたが、結局大正三年に智惠子との結婚を許してもらふやうに兩親に申出た。兩親も許してくれた。兩親のもとにかしづかず、アトリエに別居するわけなので、土地家屋等一切は兩親と同居する弟夫妻の所有とする事にき

めて置いた。私達二人はまつたく裸のままの家庭を持つた。もちろん熱海行などはしなかつた。それから實に長い間の貧乏生活がつづいたのである。

彼女は裕福な豪家に育つたのであるが、或はその爲か、金錢には實に淡泊で、貧乏の恐ろしさを知らなかつた。私が金に困つて古著屋を呼んで洋服を賣つて居ても平氣で見てゐたし、勝手元の引出に金が無ければ買物に出かけないだけであつた。いよいよ食べられなくなつたらといふやうな話も時々出たが、だがどんな事があつてもやるだけの仕事をやつてしまはなければねといふと、さう、あなたの彫刻が中途で無くなるやうな事があつてはならないと度々言つた。私達は定收入といふものが無いので、金のある時は割にあり、無くなると明日からばつたり無くなつた。金は無くなると何處を探しても無い。二十四年間に私が彼女に著物

を作つてやつたのは二三度くらゐのものであつたらう。彼女は獨身時代のぴらぴらした著物をだんだん著なくなり、つひに無裝飾になり、家の内ではスエタアとヅボンで通すやうになつた。しかも其が甚だ美しい調和を持つてゐた。「あなたはだんだんきれいになる」といふ詩の中で、

をんなが附屬品をだんだん棄てると
どうしてこんなにきれいになるのか
年で洗はれたあなたのからだは
無邊際を飛ぶ天の金屬

と私が書いたのも其の頃である。

自分の貧に驚かない彼女も實家の沒落にはひどく心を傷めた。幾度か

實家へ歸つて家計整理をしたやうであつたが結局破産した。二本松町の大火。實父の永眠、相續人の遊蕩。破滅。彼女にとつては堪へがたい痛恨事であつたらう。彼女はよく病氣をしたが、その度に田舍の家に歸ると平癒した。もう歸る家も無いといふ寂しさはどんなに彼女を苦しめたらう。彼女の寂しさをまぎらす多くの交友を持たなかつたのも其の性情から出たものとはいへ一つの運命であつた。一切を私への愛にかけて學校時代の友達とも追々遠ざかつてしまつた。僅かに立川の農事試驗場の佐藤澄子さん其の他兩三名の親友があつたに過ぎなかつたのである。それでさへ年に一二度の往來であつた。學校時代には彼女は相當に健康であつて運動も過激なほどやつたやうであるが、卒業後肋膜にいつも故障があり、私と結婚してから數年のうちに遂に濕性肋膜炎の重症のにかかつて入院し、幸に全治したが、その後或る練習所で乘馬の稽古を始めた

所、そのせゐか後屈症を起して切開手術のため又入院した。盲腸などでも惱み、いつも何處かしらが惡かつた。彼女の半生の中で一番健康をたのしんだのは大正十四年頃の一二年間のことであつた。しかし病氣でも彼女はじめじめしてはゐなかつた。いつも清朗でおだやかであつた。悲しい時には涙を流して泣いたが、又ぢきに直つた。

昭和六年私が三陸地方へ旅行してゐる頃、彼女に最初の精神變調が來たらしかつた。私は彼女を家に一人殘して二週間と旅行をつづけた事はなかつたのに、此の時は一箇月近く歩いた。不在中泊りに來てゐた姪や、又訪ねて來た母などの話をきくと餘程孤獨を感じてゐた樣子で、母に、あたし死ぬわ、と言つた事があるといふ。丁度更年期に接してゐる年齡であつた。翌七年はロザンゼルスでオリムピックのあつた年であるが、その七月十五日の朝、彼女は眠から覺めなかつた。前夜十二時過にアダ

リンを服用したと見え、粉末〇〇瓦入の瓶が空になつてゐた。彼女は童女のやうに圓く肥つて眼をつぶり口を閉ぢ、寢臺の上に仰臥したままいくら呼んでも搖つても眠つてゐた。呼吸もあり、體溫は中々高い。すぐ醫者に來てもらつて解毒の手當し、醫者から一應警察に屆け、九段坂病院に入れた。遺書が出たが、其にはただ私への愛と感謝の言葉と、父への謝罪とが書いてあるだけだつた。その文章には少しも頭腦不調の痕跡は見られなかつた。一箇月の療養と看護とで平復退院。それから一箇年間は割に健康で過したが、そのうち種々な腦の故障が起るのに氣づき、旅行でもしたらと思つて東北地方の溫泉まはりを一緒にしたが、上野驛に歸着した時は出發した時よりも惡化してゐた。症狀一進一退。彼女は最初幻覺を多く見るので寢臺に臥しながら其を一々手帳に寫生してゐた。刻々に變化するのを時間を記入しながら次々と描いては私に見せた。形

や色の無類の美しさを感激を以て語つた。さうした或る期間を經てゐるうちに今度は全體に意識がひどくぼんやりするやうになり、食事も入浴も嬰兒のやうに私がさせた。私も醫者もこれを更年期の一時的現象と思つて、母や妹の居る九十九里濱の家に轉地させ、オバホルモンなどを服用させてゐた。私は一週一度汽車で訪ねた。昭和九年私の父が胃潰瘍で大學病院に入院、退院後十月十日に他界した。彼女は海岸で身體は丈夫になり朦朧狀態は脫したが、腦の變調はむしろ進んだ。鳥と遊んだり、自身が鳥になつたり、松林の一角に立つて、光太郎智惠子光太郎智惠子と一時間も連呼したりするやうになつた。父死後の始末も一段落ついた頃彼女を海岸からアトリエに引きとつたが、病勢はまるで汽罐車のやうに驀進して來た。諸岡存博士の診察もうけたが、次第に狂暴の行爲を始めるやうになり、自宅療養が危險なので、昭和十年二月知人の紹介で南

品川のゼームス坂病院に入院、一切を院長齋藤玉男博士の懇篤な指導に據ることにした。又仕合なことにさきに一等看護婦になつてゐた智惠子の姪のはる子さんといふ心やさしい娘さんに最後まで看護してもらふ事が出來た。昭和七年以來の彼女の經過追憶を細かに書くことはまだ私には痛々しすぎる。ただ此の病院生活の後半期は病狀が割に平靜を保持し、精神は分裂しながらも手は曾て油繪具で成し遂げ得なかつたものを切紙によつて樂しく成就したかの觀がある。百を以て數へる枚數の彼女の作つた切紙繪は、まつたく彼女のゆたかな詩であり、生活記錄でありたのしい造型であり、色階和音であり、ユウモアであり、また微妙な愛憐の情の訴でもある。彼女は此所に實に健康に生きてゐる。彼女はそれを訪問した私に見せるのが何よりもうれしさうであつた。私がそれを見てゐる間、彼女は如何にも幸福さうに微笑したり、お辭儀したりしてゐた。

最後の日其を一まとめに自分で整理して置いたものを私に渡して、荒い呼吸の中でかすかに笑ふ表情をした。すつかり安心した顏であつた。私の持參したレモンの香りで洗はれた彼女はそれから數時間のうちに極めて靜かに此の世を去つた。昭和十三年十月五日の夜であつた。

九十九里濱の初夏

私は昭和九年五月から十二月末まで、毎週一度づつ九十九里濱の眞龜納屋といふ小さな部落に東京から通つた。頭を惡くしてゐた妻を其處に住む親類の寓居にあづけて置いたので、その妻を見舞ふために通つたのである。眞龜といふ部落は、海水浴場としても知られてゐる鰯の漁場千葉縣山武郡片貝村の南方一里足らずの濱邊に添つた淋しい漁村である。

九十九里濱は千葉縣銚子のさきの外川の突端から南方太東岬に至るまで、殆ど直線に近い大弓狀の曲線を描いて十數里に亘る平坦な砂濱の間、眼をさへぎる何物も無いやうな、太平洋岸の豪宕極まりない濱邊である。

その丁度まんなかあたりに眞龜の海岸は位する。

私は汽車で兩國から大網驛までゆく。ここからバスで今泉といふ海岸の部落迄まつ平らな水田の中を二里あまり走る。五月頃は水田に水がまんまんと漲つてゐて、ところどころに白鷺が下りてゐる。白鷺は必ず小さな群を成して、水田に好個の日本的畫趣を與へる。私は今泉の四辻の茶店に一休みして、又別な片貝行のバスに乘る。そこからは一里も行かないうちに眞龜川を渡つて眞龜の部落につくのである。部落からすぐ濱邊の方へ小徑をたどると、黑松の防風林の中へはいる。妻の逗留してゐる親戚の家は、此の防風林の中の小高い砂丘の上に立つてゐて、座敷の前は一望の砂濱となり、二三の小さな漁家の屋根が點々としてゐるさきに九十九里濱の波打際が白く見え、まつ青な太平洋が土手のやうに高くつづいて際涯の無い水平線が風景を兩斷する。

午前に兩國驛を出ると、いつも午後二三時頃此の砂丘につく。私は一週間分の藥や、菓子や、妻の好きな果物などを出す。妻は熱つぽいやうな息をして私を喜び迎へる。私は妻を誘つていつも砂丘づたひに防風林の中をまづ歩く。そして小松のまばらな高みの砂へ腰をおろして二人で休む。五月の太陽が少し斜に白い砂を照らし、微風は海から潮の香をふくんで、あをあをとした松の枝をかすかに鳴らす。空氣のうまさを滿喫して私は陶然とする。丁度五月は松の花のさかりである。黑松の新芽のびたさきに、あの小さな、黄いろい、俵のやうな、ほろほろとした單性の花球がこぼれるやうに著く。

松の花粉の飛ぶ壯觀を私は此の九十九里濱の初夏にはじめて見た。防風林の黑松の花が熟する頃、海から吹きよせる風にのつて、その黄いろい花粉が飛ぶさまは、むしろ恐しいほどの勢である。支那の黄土をまき

あげた黄塵といふのは、素より濁つて暗くすさまじいもののやうだが、松の花粉の風に流れるのは其の黄塵をも想像させるほどで、ただそれが明かるく、透明の感じを持ち、不可言の芳香をただよはせて風のまにまに空間を滿たすのである。さかんな時には座敷の中にまでその花粉がつもる。妻の浴衣の肩につもつたその花粉を輕くはたいて私は立ち上る。妻は足もとの砂を掘つてしきりに松露の玉をあつめてゐる。日が傾くにつれて海鳴りが強くなる。千鳥がつひそこを駈けるやうに歩いてゐる。

智惠子の切抜繪

精神病者に簡單な手工をすすめるのはいいときいてゐたので、智惠子が病院に入院して、半年もたち、昂奮がやや鎭靜した頃、私は智惠子の平常好きだつた千代紙を持つていつた。智惠子は大へんよろこんで其で千羽鶴を折つた。訪問するたびに部屋の天井から下つてゐる鶴の折紙がふえて美しかつた。そのうち、鶴の外にも紙燈籠だとか其他の形のものが作られるやうになり、中々意匠をこらしたものがぶら下つてゐた。すると或時、智惠子は訪問の私に一つの紙つづみを渡して見ろといふ風情であつた。紙包をあけると中に色がみを鋏で切つた模樣風の美しい紙細

工が大切さうに仕舞つてあつた。其を見て私は驚いた、其がまつたく折鶴から飛躍的に進んだ立派な藝術品であつたからである。私の感嘆を見て智惠子は恥かしさうに笑つたり、お辭儀をしたりしてゐた。

その頃は、何でもそこらにある紙きれを手あたり次第に用ゐてゐたのであるが、やがて色彩に對する要求が強くなつたと見えて、いろ紙を持つて來てくれといふやうになつた。私は早速丸の内のはい原へ行つて子供が折紙につかふいろ紙を幾種か買つて送つた。智惠子の「仕事」がそれから始まつた。看護婦さんのいふところによると、風邪をひいたり、熱を出したりした時以外は、毎日「仕事」をするのだといつて、朝からしきりと切紙細工をやつてゐたらしい。鋏はマニキュアに使ふ小さな、尖端の曲つた鋏である。その鋏一丁を手にして、暫く紙を見つめてゐてから、あとはすらすらと切りぬいてゆくのだといふ事である。模樣の類

は紙を四つ折又は八つ折にして置いて切りぬいてから紙をひらくと其處にシムメトリイが出來るわけである。さういふ模様に中々おもしろいのがある。はじめは一枚の紙で一枚を作る單色のものであつたが、後にはだんだん色調の配合、色量の均衡、布置の比例等に微妙な神經がはたらいて來て紙は一個のカムバスとなつた。十二單衣に於ける色襲ねの美を見るやうに、一枚の切抜きを又一枚の別のいろ紙の上に貼りつけ、その色の調和や對照に妙味盡きないものが出來るやうになつた。或は同色を襲ねたり、或は近似の色で構成したり。或は鋏で線だけ切つて切りぬかずに置いたり、いろいろの技巧をこらした。此の切りぬかずに置いて、其を別の紙の上に貼つたのは、下の紙の色がちらちらと上の紙の線の間に見えて不可言の美を作る。智惠子は觸目のものを手あたり次第に題材にした。食膳が出ると其の皿の上のものを紙でつくらないうちは箸をと

らず、そのため食事が遲れて看護婦さんを困らした事も多かつたらしい。千數百枚に及ぶ此等の切抜繪はすべて智惠子の詩であり、抒情であり、機智であり、生活記錄であり、此世への愛の表明である。此を私に見せる時の智惠子の恥かしさうなうれしさうな顏が忘れられない。

詩集「智恵子抄」目次年表

人に	明治四十五年七月	五
或る夜のこころ	明治四十五年八月	一〇
おそれ	明治四十五年八月	一四
或る宵	大正元年十月	二一
郊外の人に	大正元年十一月	二六
冬の朝のめざめ	大正元年十一月	三〇
深夜の雪	大正二年二月	三五

人類の泉　大正二年三月　三九
僕等　大正二年十二月　四六
愛の嘆美　大正三年二月　五一
晩餐　大正三年四月　五五
樹下の二人　大正十二年三月十一日　五九
狂奔する牛　大正十四年六月十七日　六四
鯰　大正十五年二月五日　六八
夜の二人　大正十五年三月十一日　七一
あなたはだんだんきれいになる　昭和二年一月六日　七三
あどけない話　昭和三年五月十日　七四

同棲同類　昭和三年八月十六日　七六
美の監禁に手渡す者　昭和六年三月十二日　七八
人生遠視　昭和十年一月二十二日　八〇
風にのる智恵子　昭和十年四月二十五日　八一
千鳥と遊ぶ智恵子　昭和十二年七月十一日　八三
値ひがたき智恵子　昭和十二年七月十二日　八五
山麓の二人　昭和十三年六月二十日　八七
或る日の記　昭和十三年八月二十七日　九〇
レモン哀歌　昭和十四年二月二十三日　九二
荒涼たる歸宅　昭和十六年六月十一日　九四

亡き人に　昭和十四年七月十六日　九六
梅酒　昭和十五年三月三十一日　九九
○
うた六首　一〇三
○
智惠子の半生　昭和十五年九月　一〇九
九十九里濱の初夏　昭和十六年五月　一一四
智惠子の切抜繪　昭和十四年一月　一一八

「智惠子抄」　初版
表紙ハ特漉西ノ内
見返ハ手漉鳥ノ子紙
本文ハ奉書紙生漉

昭和十六年八月十五日印刷
昭和十六年八月二十日發行

㊞定價貳圓五拾錢

著者　高村光太郎
發行者　澤田伊四郎　東京市芝區新橋際復興ビル
印刷所　株式會社　細川活版所　東京市京橋區銀座四ノ四
發行所　龍星閣　東京市芝區新橋際・復興ビル　振替口座東京五〇六五　電話銀座一六〇二・四七六一

配給元　東京市神田區淡路町二ノ九　日本出版配給株式會社

尾崎喜八譯　阿蘭陀組曲　二・五〇

尾崎喜八譯　北方の歌　二・五〇

尾崎喜八譯　モスコウの旅　一・六〇

片山敏彦詩集　早春　近刊

大手拓次詩畫集　蛇の花嫁　四・〇〇

大手拓次譯詩集　異國の香　二・五〇

富安風生隨筆集　淡水魚　二・五〇

山口青邨隨筆集　わが庭の記　二・五〇

宮田重雄隨筆集　微笑佛　近刊

木暮理太郎著	山の憶ひ出 上・下、一組	七・三〇
木暮理太郎著	ヒマラヤ	近刊
武田久吉著	日本の草木	近刊
武田久吉著	繭玉と案山子	近刊
山本千代喜著	酒の書物	一〇・〇〇
山本千代喜著	食事志	近刊
平野長英著 川崎隆章著	尾瀬	三・五〇
川島理一郎著	旅人の眼	三・〇〇
川島理一郎著	北支と南支の貌	一・三〇